追悼文

関口定美先生を追悼して

日本アフェレシス学会理事長・東京女子医科大学 阿 岸 鉄 三

関口定美先生が、1999年1月6日に亡くなられ、1月18日に、札幌で北海道血液センター葬が厳かに執り行われました。関口先生の生前のご功績を、主に学会活動を通じての交流から振り返り、ご冥福を祈る縁としたいと思います。

数年前より、下肢から始まった筋肉の萎縮性疾患に悩んでおられたのは知っていましたが、病気の始まりの頃に病態不明の奇病とご自身から伺ったきりで、筋萎縮性側索硬化症であったとは北海道血液センター葬まで知りませんでした。比較的周縁にいる医療関係者でも、多くの人は知らなかったようでした。同じ医師として、この病名の持つ意味、すなわち、不良な生命予後と終末時の予測される状況を自ら知りながら生きられた時間の苦悩と、そして、それに耐えながら最後まで仕事に励まれた先生の使命感に深い感銘を覚え、生前の交流を振り返りながら追悼したいと思います。

関口先生との交際が始まったのは、私が1960年に北大第1外科(三上外科)に入局したときで、先生は、“せきさん”と通称呼ばれる、ときにはにらみを利かせる1年上の先輩でした。それから1968年まで“同じ医局の飯を食った仲”であった訳ですが、研究班も違えば、受持の病室も異なり、あまり個人的な交際はありませんでした。

その後、私は一足先に第1外科を辞し、神戸大学から現在の東京女子医科大学と移り、関口先生も旭川医科大学に移られて、没交渉の状態が20年近くも続きました。そのうち、1980年代中頃からと思いますが、関口先生がなにかでっかい仕事をしておられるというようなことが聞こえてきましたが、専門が違えば、風の便りというしかなく、今にして思えば、北海道血液センター所長という要職について、世界にも有数の血液センターを育てられ、活躍されていたのです。

そのうち、不思議なことに、十数年前から関口先生との仕事の上での交際が復活しました。私は、三上外科の頃から血液浄化という、簡単にいうと血液を体の外に引き出して毒性物質を取り除く医療技術に関係することを専門的に研究してきましたが、そのなかで、アフェレシスという濾過器を使って血液から血漿成分

を分離し浄化する技術が、1970年代末から発展してきました。遠心分離器を使うアフェレシスは、実は、血液センターでは先行の技術であったので、共通の研究・臨床応用について、いろいろと情報を交換し、論議する場ができたのでした。それは、主に治療的アフェレシス研究会、現在の日本アフェレシス学会においてでした。そこで、関口先生は、血液センター関連の各種のアフェレシス技術の研究開発に従事され、先生が所長として導かれる北海道血液センターは、血液の収集から血液製剤の分配といった日常的血液事業ばかりでなく、血液に関する基礎研究にいたる広い分野で、日本では他の追従を許さない、また、国際的にも高く評価されている血液センターであることを明確に認識しました。関口先生の強力な指導力に依るところが大きいと評価されていました。

さらに、密接な関係が新たにできました。私は1970年代の神戸大学にいた頃から、白い血液と呼ばれた酸素を溶解して運搬するperfluorochemicalに興味をもって研究をしていました。それは、さらに発展してその後、人の赤血球のヘモグロビンを利用する、いわゆる代用赤血球、あるいは人工酸素運搬体(物)と一般的に呼ばれるものになりました。近い将来、わが国での臨床利用を視野に入れながら、これを専門的に研究する場として、1994年に日本血液代替物学会が設立されましたが、ここでも関口先生と接触をもつようになったのです。関口先生はその中心的創立メンバーとして、最初は土田英俊会長を強力に補佐する副会長として活躍され、ついで新年度からは会長として学会を主導されることが期待されていたのですが、それも叶わぬこととなりました。

関口先生は、その日のあることを責任ある地位にある医師として冷静に予断し、事後の混乱が起らないようにいろいろと配慮されていたと聞いています。なかなかできないことで、見習うべきことと肝に銘じています。

現代のような長寿社会では、まだまだご活躍が期待できるお年で亡くなられたことを惜しみながら、安らかにお休みくださるよう冥福をお祈りします。